月刊

こころのとも

第十四巻
五月号

人生のバンジージャンプ

現代人は
バンジージャンプでは
背中の綱の丈夫さを
信じて跳ぶことができる
でも
人生では
神仏の見えない綱を
信じて竿頭の一歩を
踏み出すことはできない

馬鹿の一つ覚え

馬鹿の一つ覚えでも
あるまいに
いまだに
構造改革なくして
景気回復なしとは

平等の哲学＝悪平等

平等を
明かす哲学
見つからず
悪平等を
平等とする

人生を考え直して みたい人は（一一二）

―空海『即身成仏義』解説（一五）

〔（四）―5顕教と密教の六大説〕

諸（もろもろ）の顕教の中には、四大等を以て非情と為す。密教には、則ち此れを説いて如来の三昧耶身と為す。四大等、心大を離れず。心色、異なると雖（いえど）も、その性即ち同なり。

色即ち心、心即ち色、無障無礙なり。智即ち境、境即ち智、智即ち理、理即ち智、無礙自在なり。

能・所の二生有りと雖も、都（すべ）て能・所を絶せり、法爾（ほうに）の道理に何の造作か有らん。能・所等の名は、皆是れ密号なり。常途浅略（じょうずせんりゃく）の義を執して、種種の戯論を作（な）すべからず。

是（かく）の如くの六大法界体性所成（しょじょう）の身は、無障無礙にして、互相（たがい）に渉入相応し、常住不変にして同じく実際に住せり。

故（かるがゆえ）に頌（じゅ）に、「六大無礙にして常に瑜伽なり」と曰う。無礙とは、渉入自在の義なり。常とは、不動不壊（ふえ）等の義なり。瑜伽とは、翻（ほん）じて相応と云う。相応渉入は、即ち是れ「即」の義なり。

前回に続きました、現代語訳として『弘法大師空海全集第二巻』（筑摩書房刊）の中の松本照敬訳注から、引用させて頂きます。

＊　＊　＊　＊

もろもろの一般的な仏教の教えの中にあっては、地・水・火・風の四大などを、物質的なものとしている。密教においては、これを説いて、如来の象徴となしている。

四大などは、心大を離れるものではない。心と物質は、異なるとはいっても、その性質は同じである。

物質はすなわち心、心はすなわち物質であり、さわりなくさまたげがない。主観たる智は、すなわち客観たる道理であり、道理はすなわち智である。どちらも通じあっていて自由である。

「生み出すもの〔能生〕」と「生み出されるもの〔所生〕」との二者があるといっても、本来、すべてそのような「なす」と「なされる」との対立を離れているのである。あるがままの道理に、どうして造るとか作られる

とかいう対立があるだろうか。「なす」「なされる」などの言いあらわしは、みな象徴的な表現（密号）によるものである。世間一般で用いられる皮相的な意味にとらわれて、さまざまに無意味な議論をなすべきでない。

このような「六大」によって示される宇宙そのものより成る身体は、さわりなくさまたげなく、互いに交渉し、応じあって永遠不変であり、そのまま真実にして究極的なあり方で存在している。

それゆえに、詩に、「宇宙のいのちの六大は、さえぎるものがなく、永遠に結びつきあい、とけあっている」というのである。

〈さえぎるものがなく〉とは、「六大」が自由自在に交渉しあう、という意味である。

〈永遠に（常）〉とは、動かない・こわれない、などの意味である。

〈結びつきあい（瑜伽）〉は、梵語のヨーガであり、漢語では「相応」という。あい応じあい交渉しあうということが、「即身成仏」の「即」の意味である。

＊　＊　＊　＊

現代語訳をお読み頂ければお分かりのように、さして難しい言葉はありません。しかし、この内容を理解することは、かなり困難のように思えます。

例えば、「四大（地・水・火・風）などは、心大を離れるものではない。心と物質は、異なるとはいっても、その性質は同じである」ですが、なかなかご理解頂けないのではないかと思うのです。

「心大」という言葉は、三月号の図の中で「真言者とは心大なり」と、既に出ていました。意味は、私の言葉で言いますと「精神」のすべて、つまり自己、他己、たましい、あたま、からだ、こころ、ずい、の構造と機能のすべてのことを言っていると思います。

地・水・火・風の四大が「精神」を離れるものではなく、心と色（現代語訳では物質と訳していますが、もう少し広く物質的現象と訳す方がよいように思います。おそらく、この物質には、いわゆる物質だけではなく、動物以外の生物、つまり、草や木なども含まれているのではないかと思います）は異なるけれども、その性質（本質）は同じである、ということですが、なかなか常識では理解できません。

何度か、ふれたと思いますが、これは、どこまでも解脱の境地のことをいっているのです。ですから、その体験の無い人には、実は、理解を超えているのです。

この六大につきましては、昨年の六月号と九月号とで、かなり詳しく述べました。ご参照いただければ、幸いで

す。そこでも、書きましたが、修法の体験の中で、自分と如来とが一体であると実感できますと、この世のあらゆる存在（物質・生命・精神）が、自分と一体であると感じることができるのです。そうした存在の中で、誰でもが最も身近に感じることができるものを象徴的に地・水・火・風（・空）で表しているのです。従いまして、これらは、どこまでも精神が構成しました概念なのです。実物と思ってはなりません。

「四大（地・水・火・風）などは、心大を離れるものではない。心と物質は、異なるとはいっても、その性質は同じである」とは、こういうことなのです。

つまり、四大は、人間の精神が構成したものなのです。ですから、あらゆる存在が自分と一体であると実感することとを合わせて考えますと、心（精神）とそれ以外の存在（色）とは、本質的に一体・同体なのです。

「主観たる智は、すなわち客観たる道理であり、道理はすなわち智である」とありますが、私の理論で言いますと、無意識の自己と他己が統合されますと、主観と客観とは、一体となり、自己に属するものと他己に属するものとが、形式論理では矛盾ですが、解脱の境地では、一体なのです。この部分以下も、このことを念頭に置いて下されば、ご理解いただけるのではないでしょうか。

自作詩短歌等選

平和ってきれいごと

世界中
平和平和と
きれいごと
どうすりゃ平和
実現するの

そもそも平和って
どんなことなの

感情的に
平和平和と
叫んでみても
決して平和
訪れはせん

自由意志に基づく売春

女性の
自由意志に基づく
売春を
労働の権利として
認めよう

こういう主張がある

あなたは
どうお考えですか

酒への依存

歌の文句じゃ
ないけれど
酒は涙か
ため息か
酒への依存
ますます増加

協調を言うは易しい

いま
世界中で

民族の
宗教の
思想の
主義の
国家の
個人の

対立・抗争が
沸き上がっている

協調精神を
言うことは易しい
でも
なぜ実際に
協調ができないのか
その理由を
言う人に出会わない

貧富の差の克服

テロ脅威の
根本原因は
貧富の差の
拡大にある

この克服には
力の論理よりも
人間の叡知を生かす
必要があるのでは
という人がいる

でも
どんな叡知が
あり得るのか
全く提案がない

少なくとも
資本主義や
民主主義の中には
それは存在しない

実は
貧富の差の克服には
それらの主義を超えた
思想がいるのだが

花をおしむこころ

草刈りや
タンポポのこせと
言うむすめ

戦争をなくす為には

民主主義が確立すれば
戦争はなくなる
という考え方がある

でもそれは
間違いだ

戦争をなくす為には
他己原理がいる
たとえば
「汝の敵を愛せよ」
がいる
「慈・悲・喜・捨のこころ」
がいる
その為には
こころを磨く修行
がいる
自分を捨てる修行
がいる

犯罪草加の一因

中国人犯罪グループ
いわく

日本で犯罪をする理由は
刑罰が軽くて
拘置所や刑務所が
ホテルのように快適だ
そしてなによりも
日本人をやっても
罪の意識が軽くてすむ
中国での教育のお陰よ

狂った日本

欲望に
狂った日本
哀れなり
狂ったことも
気付けずに行く

コメ関税を引下げよ

コメの関税率は
４９０％という
常識はずれの数字だ
ＷＴＯの議長勧告通り
４５％切り下げても
２７０％という
高関税が残り
国内の米作りが
壊滅的な打撃を
受けるとは思えない

こんなことを
平気で言う
経済ジャーナリスト
がいる

経済原則だけで
農業のような
一次産業を律しては
ならないことが
全く
分かっていない
無責任な発言に驚く

荒れる学校＝要らぬ学校

友達に
あくたいつかれ
傷ついて
休ます学校
要らぬ学校

安藤氏の東大生観

安藤忠雄氏によれば
東大生は
間違いを指摘され
遠回りすることを
極度に恐れる
という
また
彼らが
生きる貪欲さと
責任感を持ったら
どれだけ道が
開けるだろうか
という

間違いや失敗への恐れ
生きる意欲の喪失
無責任さ
これらはすべて
自己肥大した人間の
顕著な特徴なのだ

自作随筆選

うそを法律で禁止する

四月二十七日付けの朝日新聞「天声人語」に、うそについてのニュースとそれへのコメントが載りました。とても気になることが書いてありましたので、取り上げることにしました。

実は、うそにつきましては、既に、昨年の二月号で、「不妄語戒の不毛さ」と題して、検討しました。ご参照下さい。

今回のは、前回よりももっと問題だと思いましたので、重複をおそれず、取り上げることにします。

さて、その記事ですが、次の通りです。要約しますと話が分からなくなる恐れもありますので、少し長くなりますが、出だしから必要な部分を省略なしで、引用させて頂きます。

うそのような話である。うそを法律で禁止するというのだ。新型肺炎をめぐって虚偽報告のあった中国ではなく、食品をめぐって虚偽表示が横行した日本の話でもない。米国でのことである。▼ＡＰ通信などが報じ、先日ニューヨーク・タイムズ紙が詳しく伝えた。一瞬、困った国だと思った。あの国だったらやりかねない。何しろ禁酒法を実際に実施した国だ。正しいと思ったら、法で人々に強制することをいとわないところがある▼かつては禁酒を強制した結果、闇の売買がはびこった。それをマフィアが仕切って裏社会が栄えた。その二の舞いではないか。うそが闇にもぐり、うそで固めた裏社会ができるかもしれない。マフィアが仕切るのは無理だとしても、裏社会で尾鰭（おびれ）のついたうそが表社会にあふれてきたらどうなるか。

まったくの驚きです。

この方の記述についてコメントする前に、まず、こうした「うそを法律で禁止する」という社会的な動向が、アメリカで起こってきた背景について、結論を先に言うようですが、簡単に検討しておきたいと思います。

私は、かつて、アメリカで巨大企業の不正経理が発覚しました折、そのことを「米国凋落の二つの兆し」と題して、昨年の八月号で検討しました（ご参照頂ければ幸いです）。恐らく、「うそを法律で禁止する動き」は、こうしたことが背景になって、出てきたのだと思うので

す。

世界的にみて例外的に信仰が生きているアメリカでは、うそは、聖書の教えに反するものとして、戒められているのですが、だんだんと民主主義が進化するにつれて、自己社会化がすすみ、宗教のもつ他己としての働きが弱体化して来ているのです。そうなりますと、宗教が機能しなくなってきた補いとして法律で強制せざるを得なくなっているのです。

さて、この記事へのコメントに移ります。

この記事では、うそをつかないように法律で規制することは、よくないことだとおっしゃっているのですが、前述のように、もともと信仰に裏打ちされた倫理に基づいて、人はうそを言わないのが、人の在り方として望ましいのです。でも、信仰が失われてきた現代では、信仰で守れなくなった倫理の出来るだけ多くを法律で規制せざるを得ないのです。そうしないと、社会秩序が崩壊していく、いわゆるモラル・ハザードが起こり、社会そのものの崩壊が進んでいくのです。

この記事の最後で、「うそが闇にもぐり、うそで固めた裏社会ができるかもしれない。マフィアが仕切るのは無理だとしても、裏社会で尾鰭（おびれ）のついたうそが表社会にあふれてきたらどうなるか」と言われていますが、これは、未来のアメリカでおこると懸念されることなぞではなくて、まさにいま、現に、日本がそうなっていることに、この記事を書いた方は、気付いていないのではないでしょうか。

アメリカでは、大企業の不正経理が発覚して、大騒ぎになりましたが、日本では、大企業がうそをつくことに誰も驚きません。当たり前だと思っています。

そして、何もうそをつくのは、財界人だけではありません。正直者の政治家が果しているのかどうか、まったく疑問ですし、私の体験では、大学ですら、教官で、自分の都合の悪いことは、平気でうそをつく人がいます。

私たちの年代の者は、かつては、親や教師から、「うそは泥棒のはじまり」といって、うそをつくことを強く戒められました。また、正直者が得をし、うそつきが損をする寓話もよく話してくれましたし、また読んでくれました。でも、いま、そうする親や教師は殆どいないのではないでしょうか。

釈尊は、五戒の一つとされた不妄語戒がかくも無惨に廃れていく姿を、あの世からご覧になって、なんと思われていることでしょうか。現在、日本は、正法、像法、末法から、仏教者は誰も言いませんでしたが、「無法」の時代へと突入しているのではないでしょうか。

釈尊のことば（一二二）

―法句経解説―

（三七三）修行僧が人のいない空屋（あきや）に入って心を静め真理を正しく観ずるならば、人間を超えた楽しみがおこる。

この偈で大切な点の一つは、「人のいない空屋」です。この言葉に接しますと、私は、『聖書』の解説をしたとき読んだマタイ福音書第6章6節「あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい」という言葉を思い出します。

私も、平成元年に、大学宿舎の部屋に祭壇をもうけ、一人でひたすら真言密教の修法を行じました。

次に、「心を静め」るということですが、これは、一般的に言いますと瞑想、仏教でいいますと、禅定ということになります。他に、これには、ヨーガ、お祈り、読経、坐禅など、修行のさまざまな方法が入ると思います。

こうした、ひたすらな修行に精進していますと、いつかは「真理を正しく観ずる」ことができるようになるのです。

ところで、真理とは、何かですが、ここでいう真理は、物理的な法則のようなものではなく、人生の真実のことです。人間存在への深い洞察のことです。

それは、いわゆる「あたま」で分かることではありません。意識を超えて勝手に湧きだしてくる直観なのです。

また、「人間を超えた楽しみ」も、同様に知的に「あたま」で考えて感じるものではありません。そうではなく、意識できなくても、心の、あるいは腹の底から勝手に湧きだして来るものなのです。

このように、真理を正しく観じ、人間を超えた楽しみは、意識を超えたものなのです。

それが、「人間を超えた」という表現になっているのです。それは、生きているだけで、勝手に湧きだしてくるものなのです。情動、特に欲望の何かが満足させられたからではなく、そうした外的な条件を超えて、自分自身の精神に勝手に、無意識の世界から沸き上がってくるものなのです。

それは、私の理論で言いますと、無意識で自己と他己が統合されたとき、感じるものなのです。無意識に宿した生きる力と如来とが統合されるとき、そうなるのです。ということは、その元は、如来さまにあるわけです。それが、また、「人間を超えた」という表現になるのです。

（三七四）個人存在を構成している諸要素の生起と消滅とを正しく理解するのに従って、その不死のことわりを知り得た人々にとっての喜びと悦楽なるものを、かれは体得する。

解説が要りそうな言葉が、いくつか出ています。　まず、「個人存在を構成している諸要素」ですが、中村元訳注によりますと、諸要素とは、「因縁の力によって成立したものである」とあります。

因縁とは、一般的には原因のことで、消滅を生じる条件や関係をいいます。

人間は、遺伝的には父母から遺伝子を半分づつもらいます。そして、受精して以後、特定の環境の中で育てられます。つまり、母体の子宮内環境、出生後の家庭環境、地域（気候を含めた）環境、受ける教育、時代、国家の経済力や体制、国際的位置など、さまざまな条件や他者との関係の中で育てられるわけです。

そうした環境の及ぼす人間精神への影響は、計り知れないものがあります。

遺伝子で規定されています身体も、当然、栄養状態や摂食物の種類などで影響を受けますが、精神はそれよりもはるかに大きな影響を環境から受けると思われます。

現在の日本のように、人々が、自己追求制度である民主主義のみを生き方の拠り所とし、経済的な豊かさを実現して、欲望をほぼ完全に満し、かつ、宗教をもたないで育ちますと、他己が著しく貧弱にしか育ちません。

ですから、自己に閉じて、自分のそうした業（不完全で、悪影響を与えた身体的・精神的条件）を背負っていることにすら気付かないのです。

偈にありますように、自分がいま存在するようになった（消滅の）こうした原因について、それが業として働き、そこから如何にして救われるかを知るならば、その理解の深さに従って、人は、不死（ニルヴァーナ）の境地で味わう喜びと悦楽とを、体得することができるのです。

しかし、自己に閉じた現代人は、不死の境地など信じませんし、そんなものの価値も認めません。ですから、その境地を体得しようとも思わないのです。

そして、どこまでも自分に執らわれて無明の闇をさまよい、過ちを犯し続けるのです。

そういう者が、いま世界中に充満しつつあります。残念ながら、このまま行けば、きっと人類は滅亡すること必定のように思えます。

（三七五）これは、この世において明らかな知慧のある修行僧の初めのつとめである。――感官に気をくばり、満足し、戒律をつつしみ行い、怠らないで、浄らかに生きる善い友とつき合え。

ハイフン（傍線）以後に書かれた、四つの条項が、知慧のある修行僧の最初の「つとめ」だと言うわけです。

その四条項とは、①感覚器官に気をくばり、それに満足すること、②戒律を守ること、③怠らないで精進すること、④清浄な生活をしている善い友とつき合うこと、ということです。

一つ一つ解説していきたいと思います。

まず、①感覚器官に気をくばり、それに満足すること、ですが、感覚器官とは、聴覚、嗅覚（きゅうかく）、味覚、視覚、触覚、などです。こうした感覚を満足させることは、快感を生みます。そうしますと、どうしてもそれに執らわれて、そのことを追求しようとします。この条項は、それを戒めているのです。特に、現代人は、この快感の追求こそが幸福をもたらすものだと勘違いしています。現に戒めるべきです。

次に、②戒律を守ること、ですが、何度も書いて来ましたように、仏教では、最も一般的なものとして五戒があります。①不殺生、②不偸盗、③不邪婬、④不妄語、⑤不飲酒、です。この前四つに、⑤不綺語、⑥不悪口、⑦不両舌、⑧不慳貪、⑨不瞋恚、⑩不邪見を加えたものを十善戒と呼んでいます。これは、檀家が行う毎日の勤行式に載せられています。現代では、五戒も十善戒も殆ど守られていません。

次に、③怠らないで精進すること、ですが、これもなかなか難しいことです。人間は、どうしても易きに流れていきます。例えば、毎日十五分のヨーガをすることは、身体的な健康にもよいし、精神的にもよいので勧めますが、これを、怠らず毎日続ける人は、そう多くはありません。たとえ、よいと認めても、自分が続けることは、とても難しいのです。真の幸福に至るには、毎日の精進以外には方法はないのですが。

最後に、④清浄な生活をしている善い友とつき合うこと、ですが、これもとても難しいことです。第一、清浄な生活をしている人が、果して日本にいるのかすらが、問題になります。私は、学生に配る『学道要諦』で「よい師・よい友にめぐり合えるように、こころの眼を磨いていこう」と書いているのですが、とても難しいように思えます。

後記

一、今年は、よく雨が降ります。畑の池が常に満水に近い状態です。

二、山の新緑がとても清々しく感じられます。畑のカヤもぐんぐん伸びています。かぜになびく姿がとても美しいと感じます。

三、先月号に不明な点がありました。申し訳ありません。それは、『即身成仏義』解説にあった○の部分です。私の使っていますワープロにないものですから、本のものを複写して張りつけようと思っていて、うっかりそのままコピーしてしまいました。○支仏は辟支仏です。意味は、現代語訳にありますように「独自にさとる者」です。

四、最近、四十年ぐらい使ったクボタの耕運機（私になって、七年使っています）が、調子が悪くなりましたので、中古の耕運機をリサイクルショップで買いました。六八年型式認定のヤンマーのディーゼルエンジン付きのものです。十一馬力ととても大きく重いのに驚いています。でも、始動が確実で、必ず一発でかかります。クボタのものは、ガソリンで始動し、灯油に切り換えるエンジンですので、ときどき不機嫌になり、困らされました。

五、退職後は、稲作にも挑戦したいと思い、いろいろ準備しています。稲作を、耕運機でやっている人はいませんので、トラクターがいると思うのですが、中古でも、四駆で安心して使えるものは、五十万円はするそうです。五反（五十アール）程度の稲作で、トラクターだけでそんなにコストを掛けますと、とても、投下資本を回収することはできないように思えます。トラクターの他にも、田植え機もコンバインも要りますので、本当に百姓は合わないと思います。

六、専業の百姓の方に聞きますと、稲作で青色申告しているが、今年は新しいコンバインを買ったので、減価償却費などがかさみ、作付面積一町二反で四十万円の赤字だったと言われていました。自分の労賃は無しでです。

月刊　こころのとも　第十四巻　五月号　（通巻一六一号）

平成十五年五月八日
〒772―8502
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号01610―8―38660